

# 女子教育に関する一つの考察（第八報）

——江戸時代の庶民の生活と教育——

岡　　ヤ　ス　子

## A Study of Women's Education (VIII)

——In the Cases of the Common People's Life Styles and  
Education During the Edo Period——

Yasuko OKA

### は　じ　め　に

慶長8年（1603年）2月、家康は宿望の將軍宣下を受け、江戸幕府を開いた。しかし、家康は僅か2年で將軍職を秀忠に譲り、その後は大御所として權威をもち、徳川氏が子々孫々にいたるまで、天下を支配するための計画を着々と実施した。まず、織田氏、豊臣氏の政治に鑑み、江戸幕府の絶対性を主張するため、諸法度・御触書・御高札など制度の新設、改廃を行い、階級制の固定化、幕府体制の社会機構に正当性をもたせる方策、さらに戦乱なき泰平の世の中で人心の安定をはからんために、文教の強化を企策し、儒教を奨励したが、その儒教が江戸時代の思想体系を確立させることとなった。まず武家にはこれまでの武道に学問を加え、文武両道の修練を求めた。

また、家康は「人の一生は重き荷を負うて遠き道を行くが如し、急ぐべからず、云々」などの家訓を遺したが、代々の將軍は大御所の教訓、方針を概ね受け継ぎ、その結果江戸時代265年の繁栄と、学問・文化の発展をみるにいたったが、学問はまず武家階層に定着した。しかし、封建支配者たちは一般民衆に学問・文化の広まることを好ましく思わなかった面があったと考えるが、やがて、商品経済の繁栄で庶民特に町人を中心に経済的余裕をもつ人々が出現し、一方、生活上の必要性も生じ、支配階層以外の間でも、積極的に学問、芸能の習得をめざす者が多くなった。さらに学問を広範囲な人々が習得できた要因の一つとして見逃すことのできないことは、印刷出版の事業である。中国文化の移入に伴って、印刷術も早くから伝わり、室町

期においては、わが国五山を中心に仏典の印刷出版が行われたが、一般的に読書するためには、書物を手写することが普通であった。貝原益軒は「人の書をからば、わが書をさし置いて、まず人の書を専一に見て、早く返すべし。（略）損汚すべからず」と教えている。（家道訓卷之三）

家康は慶長年間書籍出版を奨励したが、次第に書物出版が営利事業として成立することとなり、都会に於ては、書籍商を営む者も多くみられ、印刷本が盛んに発売されたことは人々に学問を身近かなものと感じさせる結果となったといえる。

ちなみに、広島県三次図書館の蔵書には、江戸期（一部明治初期）の「往来物」を中心とした印刷本612冊がみられる。

今回は、上記の印刷本の一部を含め、江戸時代の著書をもとに、農民・工商人の生活および教育について考察したので報告する。

### I 江戸時代庶民の生活と教育

#### 1. 農民の生活と教育

##### (1) 農民の生活

人間の生活は、その時代のもつ特質によって営みの方法に変化、特徴をきたすものである。

まず、農人の生活とさらに生活に対する訓戒、教えを中心に検討した。

江戸時代の人口3000万といわれた時代の84%は農人で、幕府をはじめ各大名の財源は農家の納入する年貢が中心であった。

家康は秀吉より譲られた領地に入国後、伊奈忠次ら

を動員して、治水工事や新田開発をはじめ、開幕間もない慶長8年3月、厳とした階級制社会の中で、ある程度の農民保護の方針を考慮した「諸国郷村掟」を幕領・大名領に対して明示した。しかし、「保護」と称しながら、実はこの掟は、小農の自立を促し、現物の年貢を本格的に増徴しようとする意図がひめられていたといわれる。すなわち、検地によって成立した江戸時代の新しい村は、年貢のかかる高請地の所持権を認められた小農を主体として構成され、その持ち高に応じて高下なく貢税を強く割当ててを原則としたのである。

貢税率は幕領では、江戸初期から時代によって変化がみられ、享保13年(1728年)からは五公五民となったが、大名領ではこれより高率の所が多く、特に上州高崎藩では八公二民という例もあった。

しかも年貢米は一粒選りの最上米が要求された。その他、本年貢のほか種々の雑税、労役が課せられたため、特に小農民の労苦は、筆舌を越えるものがあつた。その上、江戸初期には農民は、読み、書きの教育を殆ど受けておらず、文字の読めぬ者が多かったため、村役人の不正も行われやすかったという。

当時の諺に「一に農民、二に侍、三に乞食、四に町人」といわれ、貝原益軒著初学訓巻之四には「農は国の本なり。農人は田をつくる民なり。是、人をやしなふものなれば、四民の本也」と述べているが、「郷村農民共をば死なせぬように、生きぬようにと合点致し、収納申付る様」と、落穂集にはある。

また、「商人生業鑑」巻之二には、「農はたがやしを事とし、暑寒をいとはず身を苦しめ、よき米は地頭へおさめ、其糟を以て渡世とす。その恵ゆへ農民は家永く継くなり」と述べているが、定められた年貢納入できない者に対しては、実に悲惨な運命が待っていた。これに対し、熊沢蕃山は「贈池田丹波守書」の中に、これらの処置はかえって「農民の反抗をそそる」と、戒めている。

日常の食物も、地主・村役人らは米を食べることができても、中農以下は麦や粟、稗に種々の干葉や大根をきざぎみ込んだいわゆる「かて飯」が常食であり、飛弾の山間部などでは、稗の糠飯などが上等の方で、畑作地帯の江戸近郊でも「山方野方に生れては、正月三日といへども、米を口に入れる事なき所多し」(居間省要)という状態であった。

苦しさの余り、農民の中には、逃散、離村を考える者もあったが、農民が農業を捨てて奉公し、出稼ぎすることは固く禁止されていた。また、田畑の売買や質

入れは寛永20年(1643年)禁止令が出されており、寛文13年(1673年)には分地制限令も出され、1町歩10石～2町歩20石以下持高の農家は、分地・分家することも禁止されていた。

もちろん、僅かの田地を家族に分割すれば、互に経済的に破滅する結果をみることも多く、この点より「たわけ者」との言葉も出たと聞く。

## (2) 農民生活上の訓戒

長崎の人、西川如見(西洋学、天文学をも修めていた学者)著「百姓囊」巻一～巻五には農人の心得、励むべき点など唐国の例なども引用して述べている。

同書巻一をみるに「人間は三養なくては生存することは不可能である。先づ人は食はなければ命なし。次に衣なくては人倫にあらず。この点農人は穀をつくりて食を供し、麻・桑を植て蚕をかひ人に衣を提供し、人々はこの衣食を得て後、家宅造りて住所とす。これを人間の三養といふ。人民は三養ありて寿命を全くすることができ、これ農人の力である。」「しかるに、末代の人農人といへば、大小貧富の差別なく、これを下品として賤しめ、町人の富るものを富貴の人と重んずる」。つづいて、「金銀つかひの商業は、江戸時代に到り、隆盛をきわめ、天下の金銀財宝みな商人主どりて、米穀諸品の高下みな商人の定る事となり、世の金銀、ことごとく町人の手に落集り(略)」。従って、農人は一般に金銀乏しく、風俗いやしく見えて人に賤しめられることの多い世の中となつたのであろう。

農人は世評にまどわされず「百姓囊」に教える如く「奢侈のふるまひなく、四民の下座に謙りて、公の掟を恐れ謹み、子孫の驕をいましめ、農業に怠りなく、正直をまもり、家内の人を恤み恵み、郷党の交り信実を本とする」ことにつとめた者が多かったという。

また、「農家にも大小の品がわりはあれど、何れも身の分際を辨へ知て、少しも驕慢のふるまひなくば、(略)小農も大農に到りなん事うたがひなかるべし。分際を察せず、僅も驕逸の心あらば、身をほろぼし、妻子を困窮せしめ、死して天地の神譴にあづからん」と、訓している。小、中農家に課せられた責務遂行のためには、西川如見の説く心構えで生活するほかなかったのであろう。

同書のとりあげた唐土の例として「わが国の如く、家業高下なく、士も農・商を営むこともあり、農家でも、工商になる者もある。さらに四民同じく学文をし其才智の次第により選ばれて、官位に進むこともできる故に、庶民といえども学文をはげみて高官となり、

天子の大臣となりて、天下の政道をも主どる作法なり。しかし、我国ではいかに才学あり、智徳の人にてても、身分低き人物は諸国大名の儒者・医師となりて仕うるくらいにて、国政にあづかることは得ず」とある。

さらに、農人の生活について記述した寂照軒咲月著「家内用心集」巻中「農人之事」をみると「耕作の肝要は、第一家内の働く者と、牛馬の善悪による事。従って家内凡てに情をかけ、牛馬によく飼料をなして、常に正直、信実につとむること」「一年の計は春耕にあり、一日の計は鶏鳴にありといひて、朝早く起、一日に一時づつ余計に働くとするれば、年中には三百六十時間也、合せてみれば六十日の勤にあたる。三年には半年の余計の働と成、(略)おのづから耕作よく実のりて、仕合よきものなり」「かせぐに追つく貧乏なし」「凡て耕作は一種物を作りてはあしきもの也」「暦を中心に天気のよしあしを心得て、取収べし」「奢事なく只田畠耕作を面白く覚て、家内睦く、和合して働き、一に実入のよきを種物に除置、二に上物を撰て年貢におさめ、其三によき物を売て上納金と家内のつかひ金になし、扱其次うり物にならぬしなや、くだけた麦・粟・稗に菜・大根等をくはへて、家内の食物となして、つづまやかにくらす者は代々久しく相つづき、心やすく居るもの也」「耕作を無精し、儉約始末をしらず、分外に奢るは、田畠を売て、ながくくるしみの種を子孫に残す」など、農人に過酷なまでの生活と労働を求めている。

かように、江戸初期より中期に到るまで、一般農人は、只ひたすら早朝より宵闇迫るまで働かざるを得なかった為、学問・文化に心を向ける暇は殆どなかったと考えられる。男性がこのようなであれば、農人女性はさらに学問などの機会は得難かったといえよう。

### (3) 石田梅岩の学問と教誡

上記の如く、江戸初期より中期に到るまで農人は、学問を受ける機会は殆どなかったと考えられるが、農村出身者で学問に志ざし、学者となった人物もないとは云えない。その一例として石田梅岩を挙げることができる。梅岩は貞享2年(1685年)9月丹波国桑田郡東懸村の中農家の次男として出生した。

当時10石以上の収穫なき農家の次男へ土地の分割は禁止されていた。(1673年の法令、江戸中期以後には変更があり、原則は長子相続であっても、次男・三男も相続が許され、さらに女子が相続する姉家督もみられた)梅岩は11歳で村の風習に従い、京都へ送られ、商家へ丁稚奉公する身となった。5年間奉公し、奉公先

の商家の家運が傾いたため、郷里に帰り8年間農業の手伝いをした。

梅岩はその性格が理屈ばく、友人から嫌われていたというが、その性格を改めるべく努力したが、孤独な生活であった。

宝永4年(1707年)23歳の時再び京都に上り、黒柳家と称する商家に奉公し、仕事に努める一方で、暇をみては読書に励んだ。梅岩が商家の勤めと読書を両立させ得たのは、身分制度の厳しい時代とはいえ、当時商家の経済状態は武家階層を凌ぐ者が多く、この頃の京阪地方における商家では、学問所の開設に努力し、学問・文化を求める風潮が高まりはじめていたことが幸したのである。この点農村で農事に従事する人々より都市に住む町人は学問的に恵まれた環境にあったといえる。

懷徳書院というは、当時の京都の豪商が資金を持ち寄り開設した学問所で、商家の番当をはじめ奉公人の中にはこれらの学問所に通い、「学問し、古への聖賢の行ひを見聞き、あまねく人の手本になるべし」の教えの体得をめざして読書する者が多かった。

石川謙著「石田梅岩と都鄙問答」によれば、梅岩は素読のみに満足せず、そここの講席に出席して、いろいろの儒者の講釈を聞き、儒教哲学の研究に情熱を傾け、さらに小栗了雲師について正式の学問修業をすすめた。享保12年(1727年)43歳となった梅岩は、黒柳家から身をひき、さらに研修をすすめ、45歳にして(享保14年)京都の自宅を講席として公開講釈(心学)を初めた。

その屋敷の表の柱に、「講座の日時、席錢不用の事、誰でも御聞き下さるべく候。女中はおくへ御通り成さるべく候」と。女子の受講もすすめている。「男女七歳にして席を同じうせず」の平安朝時代よりの教訓をもとに、同時に学ぶとしても、男女同席は可としなかったと考えられる。

開講6～7年後には多数の門人が集る有様となった。神道・仏教の教典も修めた梅岩の学問は、書物をこえ、文字をこえて、神の心・聖人や仏の心になりきるまで修行し、精進し抜いた結果、それらの真髓を毎日毎日の生活に生かし、それが、社会の福祉、世の中の平和を保つことに役立つことを念願として教育した。

体験することによって学ぶべしと考えた梅岩の学問観は、書物中心、文字第一の享保時代の儒学学習法に対して反抗したと考えられるが、彼の学問は、文字に親しみの薄かった庶民にも人生哲学ととり組む機会を

与えたといえる。

或時故郷の人、梅岩に問うて、「汝ノ云ヘル行ヒトイフハ、礼儀三千三百ヲ習ヒ、威儀ヲ正シクスルコトニ候ヤ。左様ノコトナレバ我ヲ如キ農人ナドノ行フコトハ叶ハザル所ナリ」と。これに対し「行ト云フハ、農人ナラバ朝ハ未明ヨリ野ニ出デテ、星ヲ見テ家ニ入ル。我が身ヲ勞シテ人ヲ使ヒ、春ハ耕シ、夏ハ芸（くさぎ）リ、秋ノ歳ムルニ至ルマデ、田畠ヨリ五穀一粒ナリトモ、多ク作り出スコトヲ忘レズ、御年貢ニ不足ナキヤウニ思ヒ、ソノ余ニテハ父母ノ衣食ヲ足シ、安楽ニ養ナヒ、諸事油断ナク勉ムルハ身ハ苦勞ストイヘドモ邪ナキユヘニ心ハ安泰ナリ。身ヲ肆（ほしいま）ま）ニシ、年貢不足スル時ハ心ノ苦トナル。我が教ユル所ハ心ヲ知りテ、身ヲ苦勞シ、勉ムレバ日々安楽ニ至ルコトト知ルベシ」（梅岩著都鄙問答）と、懇切に語り聞かせたのである。

要するに心学者梅岩の教学は、学問の修業と家業経営の心構えとを一つに統合する、すなわち、身に苦勞する、勤勉努力する、勞力をいとわない心構えとその実行、実践が重点であるとしたのである。

これらは書物を読むことのみで体得できるか否かに関して、梅岩は次の例を挙げている。（都鄙問答）

播磨国姫路の在所などでも18世紀なかば、享保・元文の時代には庄屋を勤める家柄などの農家では、後継息子（姉家督もみられたが、土地を離れての学問はまだ女性には考えられなかったと思われる）を姫路や京都へ出して一応の漢学を学ばせる風習がみられた。しかし、漢学を修めた息子の殆どは、農業をおろそかに考え、刀を差して城下町に住む武家生活にあこがれ、仮に帰村しても、従来の農村の風習、伝統を見下して高慢となり、家とも村ともそぐわぬ姿勢に傾きがちであった。学問が農家にとって仇となり、家や村の平和がくずれることを憂い、息子の遊学をためらう親心がみられた。この問題について、播州の人が梅岩に意見を求めた。梅岩は、学問することは書物の講読に溜らず「身ヲツツシメ義ヲ以テ、君ヲ貴ビ、仁愛ヲ以テ父母ニツカヘ、信ヲツクシテ友ト交ワリ、ヒロク人ヲ愛シ、（略）華美ヲサケ、家業ニ精進シ、収入ヲ見通シテ支出ヲ計画的ニシ、国法ヲ守ツテ、家ヲ治メル等々ノ行動ニウツス」すなわち、人の道を知り、己および周囲の人々の実生活に役立て、生かすことが学問であると。すなわち知り、行うことが学問であるとした。

#### （4）農業の進歩と教育

「百姓囊」巻二に於て、如見は同郷人のうち85歳以上、

さらに100歳以上の人数、性別を挙げ、何れも生活振は質素であること、その中に只一人富める人あれど、「平生の修養甚質朴」なりとし、さらに「多くは下戸なり」といい、「百歳を越したるは皆女人なるも、女は男子よりは飲食も節に過ぎず、座臥行住静に、あらあらしからざる故、をのづから養生の道に叶ふ事多ければなり」と、賞している。

同巻三には「農民といえども、今の時世にしたがひ、をのをの分限に応じ、手習し、学問といふ事を人に尋聞て、こころを正し、忠孝の志をおさむべし」「農民の学問、第一には公より立置給へる御制札を読覚へ、折々村里の老若にも読聞かせ、謹で尊敬せしめ、ところどころ解説して妻子奴僕に至るまで必ず読聞かすべし」と。このことから妻・女性には必ずしも読む能力をもつことを求めているといえる。

さらに、同巻二に「近代本朝の学士、農業の和書をあらわし、印行して農書全書といへるあり。農人これを読見るべし」と、農業専門書の読書をすすめている。一方「世の学者、人を教へるに智恵のみを博くしようとして詩をつくり、文を習はしむ。肝要の本心を取りげず、慢心の気質となり、五倫の道を失ひ、人に益なく、身に害ある事のみ多し。なげかしき至りなり」。あくまで人間としての謙虚さの習得が真の学問であると述べている。

「ぼさつ実がいればうつつぶく、人間実がいればあおのく。誠に此語四民身をおさむる護身法これに過ること有べからず、いわんや農民においておや」。しかし、つづいて「農閑期には平家物語・太平記の類、その他軍記を読むべし」と、しているのは、読書の学習に合わせて戦がいかにかに世の人々に不幸を招くかを知るに役立つと考えた故であらうか。そのため「慰めのためと思ひては読むべからず」とも訓している。

近松門佐衛門の「心中宵庚申」は享保6年6月の出来事を題材としているが、大阪商人の養子半兵衛とその妻千世の心中物語りである。千世は山城の国上田村豪農平右衛門の末娘。姉お軽は養子を迎え、父と共に生活していた。千世は夫の留守中に夫の養母から有無を云わせず離縁され、仕方なく故郷へ帰る。父は病床の身、千世ははわが家のたくさんの書物の中から、平家物語、塵却記（当時広く使われた算術書）、近松浄瑠璃本など取り出し「なう父様どの本が好みか、平家物語でも」と尋ねると、父は「姉が読みさいた平家物語、祇王の段を聞かう、読みやれ」「まこと紙をつけた所が、有」と、千世は話している。この時代にな

れば、農村の女性も家庭に依るとはいえ、読書の学習をしたことが理解できる。

農業内容の変化をみるに、江戸初期より次第に綿作が盛んとなり、これを糸にとる綿車（糸車）・紡織などの道具が導入されたが、これを扱うのは各農家の女性が中心で、世の需要に応じた。「百姓囊」巻三には、古書にみられる唐土・清時代の事例を挙げている。「桑・麻を年々多く植て、蚕を養ひ、糸・布の紡織を営む事も農人の所作にて、いづれも衣食は天下の大宝なれば、農民をおほんたからと名付給ひし事むべならずや。このうち女の技として、皇后みづから諸女を率ひて養蚕、紡織をなし、蚕神を祭りたまふのよし」と記し、機織の技は女子が中心となるべしと教えている。

17世紀末期からは、農家の生活に多少の落つきがみられ、さらに18世紀に入っては農具も、からすぎ・鋤・鎚（大きめの鋤）鉞・耨（種子を蒔き、その上をならす鋤）など従来よりも優れた農機具が使用されるようになった一方、稲の品種改良、栽培技術の改善、薯づくりなどのほか、木綿の栽培も一段と盛んとなり、紡織の機具も長崎に來日した唐人より性能よきものが伝えられ、女性のかかわる紡織の能率も大いに上昇した。これらの製品を商うためには、記帳、計算などのため、農村女性も幅広く読み・書き・算術の習得が要求されたと考えられるが、その機関も見られるようになった。とはいえ、都市・城下町などに比べれば初歩的教育であったであらうことは否定できない。

農村女性には以上の如く、染・織などの技と読み・書きなどの学問を求められたが、さらに望ましいとされた技は、裁ち縫いの技術で、これは師匠について、また、母親から伝授されたが、当時の社会状態から当然要求されるべき技であったと考えられる。

農民の生活が多少向上した時代を迎えたとはいえ、農民の衣服に絹地を用いることは殆どなく、模様なしの黒また紺の麻・木綿地が中心であった。しかし、かつて寒い時期に着用した表裏を合わせた衣服を、夏になれば「ときわけ」として表裏を分けて着ることは殆どみられず、質素ではあっても四季折々の衣服の形態が整い、これらは家庭で縫製され、着用された。

習得した裁縫の技を生かしてお針屋の師匠となった女性、また、後に記述するが寺子屋の師匠をつとめた農村女性もみられるようになった。

次に、家庭生活を統制する家長権についてみるに、農家でも一般に男性の家長権は上層にいく程強かったことは云うまでもない。いろりを中心に、家族が坐る

席もそれぞれはっきりと定められていた。しかし、中農以下の殆どの家庭では、耕織の職務を男女共力で実施する関係で、主婦権はかなり強く、家長と主婦の地位は平等に近かった。飯、鍋の杓子が主婦権の象徴で、主婦以外に誰も手を触れることはできない。主婦権を嫁に渡すことを「杓子を渡す」といったように、主婦は一家の命をあづかる台所の支配者であった反面主婦権をもたぬ嫁の地位は低かった。

家長権の強かったこの時代にも、農家の子女は一部外に出れば、家長権のとどかぬ自由な世界をもっていた。若衆組・娘連中の組織がそれで、全国の農村に存在したが若衆組は未婚青年の集団で、規約もあり、若衆頭を選出し、村の祭礼、消防、治水管理などの公共事業は彼らの任務であった。若衆組、娘連中はそれぞれ若衆宿・娘宿をもち、娘連中は宿主の主婦から裁縫の技などを習得し、気軽に若衆との交りをもち、楽しく過し、互に学び、語らいの中で己を見つめ、結婚相手を見出す機会も与えられた。この二つの宿は農村に生れた若者の救いの場でもあったが、娘宿の中には明治・大正とつづき、昭和初年惜しまれて廃止した所もある。（長崎県の農村）

## 2. 町人の生活と教育

### (1) 町人の生活

西川求林著「町人囊」によれば、巻一に、「扱、庶人に四つの品あり、是を四民と号せり。士農工商これなり。士は諸国内の諸侍なり、農は耕作人なり、（略）工は諸職人なり、商は商売人なり。この四民は天理自然の人倫にて、（略）世界万国ともに此四民あらずといふ所なし。（略）このうち工と商をもって町人と号せり」とある。この説を基に、工商人を「町人」と呼び、その生活目標、生活の理想とその心構えなどについて述べる。

江戸時代における武家では、石川謙著「近世日本に於ける女子教育の発達」をみるに、妻は家名・家風の存続などのためには夫と共に責務を負い、精神面においては夫との同化融合を求められた妻も、夫の任務の代理を務め、また、表面に出て協力するなどは許されなかったとある。「女は奥のみにて闕を出でず、つとめは只衣食をととのへなどするのみにして、外事をなさざる事にて候」と、二宮尊徳も「女大学論」で教えている。これに対し町人の家庭においては、「童女専用女寺子調法記」（著者不明）の中の「女商売往来」をみるに、「凡そ商売の家に生るる人は、勿論女とて

も商取引、請取、質入の算用帳、目録の記入などで、あらゆる面で商ひに協力すべきなり」と、述べている。さらに同書中の「女実語教」には「夫はたとへば君の如く、女は従者のごとし」とあるが、町人妻の存在は、武家の妻と異なり、事業の協力者であって、ただの従者という立場でなかったことは種々の書物の記述内容から考えられる。

浮世草子の創始者、井原鶴西の著書には、町人物三部作と称せられる「日本永代蔵」「世間胸算用」「西鶴織留」がある。西鶴は「一切の人間は生れながらに、目あり、耳あり、手足あり、万人変るところなきはずなるに、長劔をさせば武士、鋏を握れば農人、十露盤・工器を持てば町人」と、区別される階級制封建社会にあっては、「金銀の有徳のゆへに常の町人も初めて世に存在が認められ、(略)」と、述べている。

かつては金銀の力に対しては絶望的、否定的立場をとっていた西鶴であったが、彼の処女作「好色一代男」(天和2年1682年著)の中で、主人公世之助は道楽者故若年より勘当の身であったが、34歳の時父親の死により、莫大な遺産を相続し、60歳で世を去るまで、情慾のままに好色生活に明け暮れたことを描き、これを通して金銀の力を肯定し、町人が「人間」として生きるからは「金銀なくては人に生れし甲斐もなし」と、町人の生きがいは金銀の蓄積にありとの論を述べている。西鶴が「町人生活のめざすべきこと、町人が追求する幸福の実現」のためには、いかにすべきかなどに関して、身近かな当時の事例を織り込んで記述した書が先に挙げた町人物三部作である。

日本永代蔵(貞享5年正月、1688年刊行)巻一に「金銀こそ二親の外に命の親」「金銀は人間の命の親と云ひ乍ら、人間の一生は短かくはかない。死んでしまへば金銀何の役に立たうか、然りといへども残して子孫のためとはなりぬ、まず富者なれと云うのである。

同巻二には「一切の人間目有、鼻耳有、手あしもかはらず、生れ付て、貴人・高人よろづの芸者は格別、常の町人、金銀の有徳ゆへ世上に名を知らるる事、是を思へば若き時よりかせぎて、ほしきものをかはす、おしき物を売とぞ。此心のごとくかせぎて奢をやむれば、よきに極る事なり。されば町人の心ざしは、根をおさめて、ふとくもつ事かんようなり」と、町人の心構えを教えている。

「町人囊」巻二に目を移せば、その冒頭に「凡町人と生れて、その道を楽まんと思はば、先町人の品位をわきまへ、町人の町人たる道理を知りて後、其心を正

し、其身を修むべし」と。金銀を貯えるには、まず町人としての心の修養が大切であると戒め、つづいて「たとへ一旦千萬の財宝を貯ふといふ共、永く庫中のみ積置ときは、其金銀死宝と成て、金銀の徳用なく、自他の重宝と成事なし」、金銀は自他共に役立つよう活用すべしと説いている。

同書巻三では「町人、農人、金銀財宝貯へ有を富貴の人といふは尤誤なるべし。町人、農人無官無位の者、何程財宝貯有とも、富貴とはいひがたし。貴の字の心を辨へ知るべし。(略)町人、農人われは富貴の身なりと心得て、華美栄耀の風体をなすもの、尤天の惡む處なり」。この書では、当時の階級制社会制度に従い、身相応の心構えで生活することが当然としている。「日本永代蔵」巻五には「貧しき農人九助は勤勉と工夫、農具の発明とこの販売により、次第に富栄へ、田畠買求め、大農家となる。木綿・稻などの実りよりかしは、利生(自然の力)にあらず、朝暮妻と共に油断なく、鋤・鋤の禿程働くが故ぞかし」「九助は一代で巨大な富を築きながら、終生絹物は着ず(略)」と、夫婦が協力して勤勉に働くこと、質素を守ることの大切さを教えているが、九助の息子九之助は、これらの戒めを身につけず、巨大な財を受継ぎながら、父の意志をつがず、8～9年が内に財を使い果し、その5人の息子に借金のみを残せり、と記している。「二代目は一代目より一段とつとめ励み、孫三代目に渡す時は家督もふやす」心掛けが大切という。そのためには「町家の子育ては、烈しきは其子がため、温きは怨となり」と、子育ての親の態度を述べている。程度を考慮する必要は当然であるが、子育てに対する親の態度は、現世代においても参考とする価値ある教訓と考える。

子育てについて再び「町人囊」をみるに「瓜のつるに茄子はならぬといふ事は、貌の上のたとへにして、こころのたとへにあらず。人間のかたちは十人に七、八人はいづくなり共、父母に似るものなり。(略)たとへかたちは父母に似たる事あり共、心は似ざるものなり。容は産ども、心はむまずといえる諺こそ実なれ」「悪人の子なり共、善人の子として教なば、悪逆をたくらむ程の罪人とはなるまじきや」と。現在に生きる私達に対する教えと考えてもよいであらう。

西鶴「世間胸算用」巻五に「不断常住の事には気をつけて見るべし。ことに昔より食酒(食事の時飲む酒)を呑めば、びんぼうの花ざかりといふ事有」。西鶴の論は厳しい。また、「銀のほしきは日本人のみでなく、長崎の唐人も同じ(略)日本に稀なるものは、唐国に



もすくなし。ことに銀たいせつにおもへばこそ、百千里の風波をしのぎ、命と銀を替る商ひにのぼりけるにて、世に銀ほど人のほしきものはないと合点いたされよ」航海の安全性不確実な時代、人間の欲望の深さを改めて感じる次第である。

「西鶴織留」巻三に「申ても申ても貧にして、うき世に住める甲斐もなし。いかなる前生の約束にて貧福のふたつ有。福者はまねかずして徳来り、貧者は願ふにそんなさなり（略）世上沙汰うとまし」。同巻三に、富者となった町人について、「家職に励み、身体堅固にして、仁義を本とし、神仏を崇める心あつかりし」と。実例をもとに、のぞましい町人の精神的・身体的のあり方を教えている。「町人囊」巻二でも、礼儀を辨へよとして「稲穂は実が入ればうつつぶき、人間実がいればあをのく」と戒め、つづいて「先おのれが身をおさめ、こころを正しく、（略）其基なくして果報を待はおろかなり」としている。同巻五では「町人利発あり、侍利発あり町人は利を捨て名を専らとするは身代をつぶすもの也。侍は名を捨て利を専らとする時は身を亡す事あり、名利を正しく求るを道を知れる人といふ」。とも教えている。

「西鶴織留」巻三を重ねてみるに「坂田の町に鍔屋といへる大問屋住けるが、昔はわづかなる人宿せしに其身才覚にて、近年次第に家栄へ、（略）これ主人の商才もさることながら、内儀はかるひ衣裳をして、朝から晩まで笑ひ顔して、中中上方の間屋には格別の機嫌をとり、身過を大事に心掛けるゆへ」と、妻の協力の重要性を述べている。同様の例が巻五にも見られる。「家栄て不足なし。主、内儀と共に末々の里人を憐、慈悲深く、此人所の宝と、村の草木もなびきける。（略）只律義千万に身をはたらき、夫婦諸共にうき時を過しぬ。（略）次第に東長者となりぬ。然も男子ばかり4人子ありて、何不足もなし。」と実例を挙げここでも、夫婦の人格・協力の必要を教えている。

「商人生業鑑」（宝暦7年、1757年、岩垣光定著）巻之一をみるに、「銭という字は金に戈を二つかきたる物なり。二つの戈を以て一つの金をあらそへば、かならず身をほろぼすのわざわひあるべし。慎て其戈きをさくべし。」「いはぬはいふにまさる。」「少しの云葉のあやまりにていひぶんできて、人と仲違ふこと多し、一度仲たがふては本のごとくなりかぬものなり。もし間違あらば、早速此方よりあやまりて、その場にて厚くわびてすますがよし。」これらの教訓は現在の私達も深く考えたい事である。

同巻之三に「大坂に大きな小間物屋あり、両替屋の出店もあり、殊の外賑ひ、商の品、薬品のほか、象牙、べっ甲、唐水牛の商ひ仕かけ、この商ひ大きに繁昌せり。（略）去る辰年大坂大火にて、出店本店とも焼失、其上土蔵まで消失し、仕入小銀もなく、とほうにくれし事なり。」その後亭主は、奉公人に残らず暇を出し、夫婦・子供・弟・若き手代1人下女1人の6人家族で、協力して商いに努め、商品づくりも従来より一段と注意深く入念に細工し、よい品を売る努力した結果、次第に商い繁昌し、14～15年にて元の商人に立戻ることができたとしている。人生における痛手、失敗に屈せず、誠実な努力をつづけることにより志を成就することが可能と教えているのである。

事例は好ましいものばかりではない。

「日本永代蔵」巻五をまた繙くに、「近代の縁組は相生の形にもかまはず、金性（持参金の多いこと）を好むこと、世の習ひとなりぬ。さらに依て、今時の仲人先金性をせんさくして、跡にて其娘子は片輪ではないかと尋ねける。むかしとは格別ねがひも替れり。」また、同巻六には「越後の国敦賀の大湊にすむ年越屋何がしとして有徳の所に久敷住なれて後、自れで、味噌、醤油をつくり、はじめは僅かなる商人なりしが、次第に家栄ける。幸の<sup>よめ</sup>ありて、約束するに、中立の人すすめて、内儀とうなずきあひて、京より今風の衣裳、巻物など調へ、（略）豪華な結納を送り、格別立派な家屋を建て、凡て華麗にしつらへた。」ところが、「近在山家の農民の出入絶へ、商売俄かにやみて、（略）親仁かせぎいだして、四十年の分限、息子六年にみな失ひぬ。金銭はもふけがたく、へりやすし。」女性の賢明き堅実さを求めている。

「日本永代蔵」巻五には、「萬屋の夫婦相果られし後、娼伊勢参宮して下向に京、大坂の遊山の人のしゃれたる風俗をみならひ、姿を移せば（当時は遊女の風俗にならう傾向あり）心もそれになりて、恠気いふ事初心（野暮）とたしなみければ、亭主此時と騒ぎ出、作病をかまへ所の養生思はしからずと、上がたにのぼり、若女（男色と女色）の二道にそまりて、日毎に蒔ける（金銀を）程にいつとなく、恋にほころび針を蔵に積てもたらず（綻びをとめえず）。その結果さしもの大金持も、すっかり金銀を失って、大晦の買物も全くできなくなったとしている。夫婦共々身を慎むべしとしているのである。

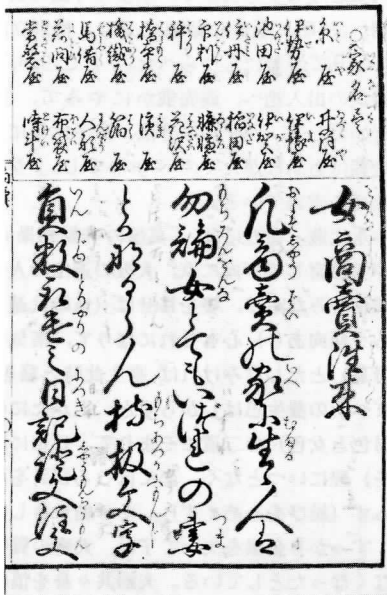
## （2）町人の家業と教育

先に引用した「女商売往来」では「大きに高利をむ

さぶり、人目かすめるの罪かさむならば、かさねて問ひ来る人も稀なるべし」と、商売永続のための心構えを教えると共に先に記した如く、商家に生れた女子は読み・書き・算術を中心に学習せよとしているが、同書には、穀類、農産物、彫刻物、文房具、手習ひ用具、収納器具、台所用具、食器、雨具その他外出時用具、薬品、香類、山海の魚・鳥類、食品など、多くの商品名を挙げ、「右の品々前後混乱ありといへども、初学の童、平生取扱べき文字なり。思ひ出るにかかせ、粗筆をはするなり。そもそも商売の家に生れたる輩は幼稚の時より、先手習、算術の執行肝要たるべき也」と、すすめている。

社会状況の変遷、社会生活上の要求に則して、適切な教育を課すべしとしているといえる。

その他「女商売往来」には世間一般に使う日常の実用単語のうち、家名盡として商家の屋号、糸屋、井筒屋ほか128、名字盡として家名、五十嵐、板倉、由良ほか201、諸道具字盡は、家具その他の道具名、貝桶、衣桁、几帳ほか58、衣類の字盡では、衣類の名称染色などで、上衣、小袖、緋袴、袴色ほか62、草木字盡と称して、松、梅、桜、桃ほか49、草花の類としては牡丹、百合、女郎花、刈萱ほか52。



女商売往来

さらに、十二ヶ月の倭名として、例えば二月は、衣

更月、梅見月、令月、仲の春、三月については、弥生、花見月、桜月、末の春などなで、各月とも四つの倭名を草書体漢字に仮名づけした文字を「女商売往来」本文の上段に印刷してある。本文内容は教戒とし、合わせて読み・書きの学習本としたものと考えられる。

その他「幼童兒女寺子式目」中の「女文通華苑」も手習いの手本であると同時に、絹布類、楽器名、女衣服類、萬染色の名、女用萬器物の字など多くの文字を印刷して、読み書きの修練に活用したものであろう。

宝暦7年著述の「商人生業鑑」巻之二に「遊芸の事、商人はいらざることながら、一向無調法でも付合すまず、手跡、十露盤は第一の事、その外家業の手透を見合、謡は百番にかぎり碁、将碁すこしばかり習ひて、其外の遊芸は無用に仕たし。読書は四書五経、孝経等よく習ひ一句一章を聞覚ゆるもよく、身の行にとりて深切に学ぶべし。子細らしく理屈をいふはよろしからず」。ましてや女子は身の程に応じ芸事を学び、読書するとも凡て身を慎しむため、理屈っぽい人間にならぬようと、戒めている。巻之四をみると「居ながらにして衣食の入用ととのい」として、大平の世の生活を「何につけても楽しきことなり」としているが、これは金力によるものと考えられるが、巻之一には「人間最大の宝は萬両の黄金、たからにあらず。家の和順をたからとす。もののふの家に生れ、武略に達し、勇力ありても人和せずば勝事かなはず、(略)地の利は人の和にしかず」「惣じて商人は風儀と律儀を持、諸人に愛敬有て、高利をとらずして、やすく売ときは、家さかへて長久なるべし。」また、巻之二をみるに「一銭の事にても、勝負ごとかく無用なり、若其座にあり合さば早速に立去るべし。今時はかるたの外のに、碁、将碁、双六、誹諧その他の事に手段を付て、此道に引入るよし、恐るべし。」と教えている。なお、同巻五には「惣じて人の生れ付にちがひあるものなり。此所をよく心得て、(略)子供のむまれだちを見立て、相應の生業をさせてよし。一人に万事そなはりしひとは、いたって稀なるべし。」現在の親も子供の能力など十分考慮して、その進路、身のふり方を考慮すべしと教えていると考えてよいであらう。

江戸の住人池田義信著「主従日用条目」に示す、町家の主人、女房、息子、娘などの日常の心構え、戒め、芸能などの一端を述べることにする。西鶴の「好色一代女」三の一の中で「貧しい商人は別として、或程度の商家にては、妻の立場は弱く、お留守人と呼ばれ、持つまじきは女なれども、世をたつるからはなくては



らぬもの」と記しているが、「主従日用条目」では、主人は「家業を大切に忍耐勤勉をもってつとめよ」。妻は主人を助け、家庭生活万事をつつまやかにつとめ、商ひに協力すべきであるが、出過ぎた口出しはよくない。主人と共に質素を守り、美服はもちろん高価な品無用のこと。夫、子供、奉公人の衣服垢染、穢れたるは女房の恥と心得、手まめに洗たくし、見苦しからぬ様。奉公人の扱いについては「夫婦とも公正な接し方」に留意せよとしている。先祖の法事について、妻の舅姑に対する態度、夫に対する略気を慎む事、その他細々と主人、女房の心得を書いている。

息子については、幼少（凡そ7歳）の内より手習、素読の稽古をし、12,3歳よりは算盤を励み習へとし、娘に対しては、幼少の内より手習し、12,3歳よりは縫針の業を励み習ふべき事と、示している。手習いは、町人の娘のみならず、芸者の中にも町人の妻となる日を夢みて、その習得に励む姿がみられたとある。15,6歳から息子は、家業に精出し、奉公人と同様に働くべきこと、娘は身分により、琴、三味線を心掛けるが好ましい。しかし家庭が中分より下は、これらを習はずとも苦しからず。暇ある時は女大学其外、身の躰方になるべき書を読むべき事と、教えている。女大学は武家の女子教育教本として活用せられたことについては、すでに前回の報告で述べたが、この時代町家の娘にも躰教育の基と考えたことが伺われる。息子の遊芸も分限に応じ謡、生花、薄茶手前等は少々心懸るとも（身の嗜みとして）三味線、小うた、浄瑠璃その他の芸は無用たるべし、といい「芸のため家業を疎にすまじき事」としている。なお、娘には、物見遊山、気随我儘をつつしみ、嫁してからの心得を訓し、「去らるるは親兄弟の顔を汚す」とたしなめ、「次男三男は他家へ養子となるも舅姑に実親の如く事へ、商売繁昌に努めよ」等の教訓がみられる。

「商人用心之事」（寂照軒咲月著）にも既に述べたと同様の商人心得を書いている。「惣じて商人は風儀を律儀に持、諸人に愛敬有て、（略）不当の高利をとる人は、不時の火難、水難にあひて倒のはやき事、諸人のしるところなり。」「年に二季には決済すべきに、金は有ながら払はぬは得なりとおもう人は、まことに愚な人なり、（略）」かような人は、あるにまかせてつかふゆへ、「次第に借金かさなりて、終には家をたもたずして、あわてふためく」と、強く戒めている。

「西鶴織留」をまた見ると、富者の母の教えには「我らが世帯の時は、雀のなかぬうちに鉄漿を付て、

髪を結、下女の水汲のうちに茶の下へ焚付、米かしぐ間に寝床をあげ、でっちに行燈掃除させて、其油紙にて、煙管を琢せ、其跡にて敷居の溝をぬぐはせ、捨る所は塵篋」とある。（既婚婦人の菌黒めは毎日することを常とした。）

「鉄漿訓」（三浦梅園著）にみる女子の教えには、「水はやはらかにして高きにあらず、物にあらず所なし。女の身もその如く（略）身をへりくだり、物いい立居のふるまひ和ぎてしとやかに、耳にさからひ、心にもとる事ありとも、かりそめにも面にあはさず。」「貞女二夫にまみえず、是婦のさだまれる則也。髪を切り尼僧の姿となるか、髪をおとさずともかうがいは吉凶ありて夫を失ってからは、有夫の時と異なる凶のものを使用することなり」とし、女功としては、「うみつむぎ、裁縫の技」を中心にせよと教えている。

「家内用心集」には、「金銀遣様用心之事」「子弟教用心之事」「言語用心之事」「朋友用心之事」「養父母舅姑用心之事」「養子嫁用心之事」「農人用心之事」「職人用心之事」「商人用心之事」「家内制詞十五ヶ条」等々ありて、これまで記述した諸書の内容と殆ど同様の教訓を懇切に述べている。

近松門左衛門の浄瑠璃に目をやれば、彼の第一回作品「曽根崎心中」の主人公である手代徳兵衛は、己れの主人に対する義理で、友人から受けた恥辱、このままでは「男がたたぬ」「男の面目がたたぬ」と、町人の根性を通すべく遊女お初と心中。「心中天網島」は作者最後の作品であるが、主人公紙屋治兵衛の妻おさんと治兵衛を通った遊女小春、二人の女性それぞれの幸福を超越して人間的義理を通さんと自分達をとりまく事件を積極的に解決せんとつとめたが、事は意のままに進まず、治兵衛は小春と心中して果てた。これら近松物の主人公を死に追いやった体面や義理は只単に浄瑠璃の主人公特有のものというのではなく、当時の人間性を撲殺してかえりみない封建支配に抵抗しようとした町人の強い心中を表現したものと考えられる。死と結びつけることは好ましくないが、日常生活の中で、義理を通す、根性を発揮することは、いつの時代にも望ましいことと考える。

次に、江戸時代後期における女子の教養、芸能について式亭三馬（本名菊地久徳）が、文化6年（1809年）刊行の「浮世風呂」を検討してみる。

三編、女湯巻之下に、銭湯に入ってきた「もの静かな人柄よき婦人、けり子とかも子」の2人の会話、「鴨子さん、此頃は何を御覧じます」「ハイうつぽを読返

さうとする所へ、活字本を求めましたから幸ひに異同を訂正してをります」「けり子さんあなたは、やはり源氏でござりますか」(略)けり子「さようでございます。加茂翁の新釈を本居大人の玉の小櫛を本にいたして書入れをしかけましたが、俗事にさへぎられました筆を採る間がございせん。」佐久間象山は「みだりがはしき源氏物語はみる人のあだとなる」と象山女訓に述べており、松陰も「源氏物語、平家物語等は、俗書にて、教とするに足らず」として読まぬがよいとしているが町人は自由に古典も選んで読んだことが理解できる。「教訓となる」と思ったのであらうか、それとも古典に魅せられたのであらうか。

同二編巻之上(女中湯之巻)では、34~35歳のおかみさんが8歳ばかりの娘お玉と2歳ばかりの子を抱いて湯に入りて来た。他の女性が声をかけた。「お杉さん御げん気で能ぞ、お玉けふは手習はお休みかへ」。娘は「いいえ」「おなまけだね」。お杉は「私の目をしのでは休みたがります。今日もおとっさんをだましてお休み致しました」娘は「お清書だからこれから行く。」8歳の女兒が師匠の塾へ手習いに行く、話である。次に浴場に入り来た30歳くらいの人がらよい風体の人に、「お鍋さん」と連れていた女兒について尋ねた。「少し見申さぬうちに大きくおなりなさいました。当年おいくつですかへ」「九つになります」「今日はお宿下りですか」「はい三夜泊りにお隙を頂きました」この女兒は大商家の娘で行儀見習のために、大名の家へ奉公に出ている。「この娘は踊を幼児から習ひ、6歳で乳母をつけて奉公に出しました。その後も師匠が大名屋敷に行き、踊をつづけさせています。」奉公の効果として母親は、「躰をうけて行儀がよくなりました」と喜んでいる、奉公によりこの他読み、書き、裁ち縫いの技の習得もしたが、「他人の飯をたべねば、他への想像(おもいやり)がございせんさ」。奉公は身の修練を目的としたとも考えられる。

同三編巻之上で、年のころ十か十一ばかりの小娘二人の風呂場での話し合い。お丸「お角さん、この間はお稽古がお休みでよいねへ」。お角「お前もかへ、お稽古のお休みが何よりも一ばんよいよ」その稽古について、「わたしのおっかさんはきついかからむせうとお叱りだよ。まあお聴な、朝むつくり起ると手習のお師さんへ行ってお座を出て来て、夫から三味線のお師さんの所へ朝稽古にゐってね、内へ帰って朝飯をたべて踊の稽古から、お手習へ廻って、お八に下ってからお湯へいって、帰ると直にお琴の御師匠さんへ、夫か

ら三味線や踊りのおさらひ、その内ちよいとばかりあすんでね、日が暮ると又琴のおさらひ、さっぱり遊ぶ隙がない」「これは、御奉公に出るためのお稽古だからと、さらへとお云いだよ」と話している。この子の母親は無筆で三絃もひけず肩身の狭い思いをしたことを娘にくりかえさせたくない思いと、御奉公に欠かせぬものとして種々の稽古をすすめているのである。一方の娘は「わっしのおっかさんは、何でも知っておいでだから、三絃の弾様が些でも違ふと直にお叱りだよ。」さらに母親は踊がよくできて7歳で「お屋敷へお上りだと、」お丸の話である。

お丸の祖母は「お丸は病身だから、手習と三絃計で、外の事はさせねへが能。其代に縫物をよく覚えるがかんじんだ」と継物をさせたと、話している。

その他、嫁の悪口として「針一つもつすべ知らぬ」と話している者もある。三編巻之下には「花を活るの、琴を弾くのと、世帯もちのいらねへ事さ、飯を焚いて着物を縫て、物にすたりの出ねへやうにすりゃア、女房の役は澤山だわな」とお山さんは話している。町人の求めた芸能、躰の概略がこれらの話から伺えると考えられ、興味深いものがある。

## II 女子教訓書にみる町人女子の教育

三次図書館の蔵書(江戸時代印刷刊行本)を基に、女子の教養について検討する。但し既に述べた内容と重複する点は省略する。

1 女今川真操鑑(著者不明)(書名を婦人一生身持草とも記してあり、表紙に永楽通宝の図あり)

奥付に「女今川はいつの頃、何人の作れるやしらねど、(略)女子を戒むる条々記されてある由。女今川になぞらへて女子を戒むる制詞の条々、禁止のこと」を記す、とある。

まず、女の嗜みとして「若き女無益の宮寺へ参り楽しむ事」「小事をも愚にし考へなく、見聞を広うする事」「貴賤それぞれの法あるを辨へず氣隨を働く事」「人の非をあげて、我に智ありとおもふ事」その他、舅姑および継子への仕え方をここでもとりあげている。

「女子は二夫にまみえず」と各教訓書で教えているが、近松浄瑠璃で当時の事件をとりあげたものの中には二度、三度婚姻した女性も登場している。また離婚成立の際、子供は父親側に引とられるのが原則とされていたため、継子に対する問題は当然考えられねばならなかったと思う。「幼きより人は皆優しく直なる朋と交わり、正しからざる友に近づくべからず」「悪人と

成、善人とかはる事、其幼少よりの教によるべし、教なく世間にあざけりを請るは誠に口惜しかるべき事ならざるや、能々慎むべし、あなかし」と。人間の持つ可能性を幼きより、すなおな善人に成長させる責任、これは先づ誰が負うべきであらうか。

「仁義礼智信の五常何れも人の行ふべき道なれば、親たる人の教ずんばあるべからず」。子育てに対する親の責務の重大さを述べているのである。

## 2 寺子読書千字文（著者不明）

この書では、筆・墨がわかく国への伝来の由来を説き、筆は、後秦の世に蒙恬といふ人、羊の毛をとりて今の筆を作り。日本では応神天皇の時よりはじまる。

墨は、黄帝の時薛稷といふ人始めて作り、「日本にては推古天皇18年高麗より渡れる墨濃といふ僧、紙墨を作ると也」と記している。「幼童子女手習の初めには、先千字文備おき、その上達をのぞむべきなり。」その他「女今川貞操鑑」と殆ど同じ女子教戒事項を述べ、さらに、「女はんべりつかへて、績紡のことおさむべし」と記している。

## 3 寺子教訓諸職往来（著者不明）

「夫士農工商は国家の至宝、日用万物調達の本源地、（略）農夫は婦と共に春耕、種まき、苗代鳥追、田植草刈、秋は稲刈、稲扱、粃磨、とうみ掛け、俵指精力盡し、年貢米不足無様心掛べき事。（略）風雨の不順の障のなき年、私欲をもって上をかすめる事天道おそるべし」。厳しい内容であるが、主婦はもちろん娘の協力も求めている。

工道の輩の項には、櫛、挽挿、<sup>ざし</sup> 根子、<sup>こういが</sup> かんざし、櫛拂、鏡磨、当世風流笠笠、帽子、引綿、塗桶、績桶は女童之手業也。この業油断なく励勤可もの也、とある。

商人については、「女子も帳面、そろばんを左右の臣とし、（略）和順に売買するは永らく災難来らず。」

なお、同書中の「天神教訓状」の一説に「学ぶに依て智を生じ、（略）文は習に随ひ義を悟る」「一日一時も抛べからず」。庶民はひたすらそれぞれの生業に誠実にとりくむべし、と教えているのである。

## 4 幼童児女寺子目式（笹山 梅庵著）

本書には、「女文通華苑」「女中手習指南」の章がある。本書ではまず手習について詳らかに教えている。「人と生れて物かかざるはひとにあらず（略）かつ師の恥親の恥すべてその身の恥辱也。」「志を起し、我恥を忘れず手習ひ精出すべき事」「早書相慎むべし、惣じて気の短き者の名人たるためしなく候間、文字律義に、丸く静かに書習申べき事」「聖賢と呼ぶる道

は物書くより起る」「書損じたる古筆成とも大切に扱ふ人は、手蹟早くあがり候間筆扱ひに心を用ふべき事」「身を立、道を得る事手習ひより善き事なし」。のぞましい人柄づくりに手習いを役立ようと考えていることが理解できる。そのため手習い時の姿勢、服装についても注意している。「臀をつき、筆先ばかりにて<sup>う</sup> 陝書し、或はうわのそらにて気楽に書作りては、手跡上る事なく候」さらに、けいこ中腕押などの遊びいたづらがあつてはならぬと戒めている。服装については、「帯の結びを正しくすべし服装は人柄をあらわす」。古書にもかやうに教えていることを忘れぬようにしたい。

その他当時の書としては珍らしく食生活上の注意がみられる。「人の奢は口より生ず、朝夕の食物は何なりとも人の与えるものをくひ、食好みを云はぬこと。買食などいやしき沙汰。」とある。

また本書を読み、書きの手本とする配慮からと思われるが、各地の名所を記載している。「大和名所堅文」として、近畿・大和・和泉・河内ほか32ヶ所を、「都路名所堅文」では、川崎・藤沢・小田原・大磯ほか14地名、「和歌名所堅文」に、和歌浦・高松・玉津嶋・妹背山その他をとりあげ、その終りに動かぬ御代こそ目出たけれ。と、結んでいる。

先に述べた「女文通華苑」の章では、和歌の指導を目標としており、能因法師、赤染衛門、和泉式部、俊成その他有名な歌人の歌を紹介し、その歌の由来、解説をもしている。特に太田道灌に関しては、「道灌、武忽の勇士にして只明暮武芸、力業のみに日をくらし。雨に降られ傘を所望した所「二八斗の女」が山吹のいみじく咲乱れた一枝と、例の和歌を示した。不満な道灌は、その由を友人に語り、はじめて歌心なき己を恥じ、「歌の道に精進」した話を引用し、和歌学習の必要を説き聞かせている。さらにこの章では、和漢列女傳、例えば、周天王の御母の事、魏の国の慈母の事、柴田勝家の妻の事などについて述べ、女性の人間教育の重要さを教えている。

「女中手習指南」の章でも先に述べた如く手習いの大切さを説いている。さらに、「衣服に香のとめやう」として、「いしやうに香をとむるは、わが身のけがれを人にふれまじき礼儀のためなり、風流のためのみにあらず」と。また、源氏物語五十四条名をあげている。その主人公光源氏などは、夜更けて、各々好みの香を焚き、香りを移した衣裳で女性の所へ通ったことは有名であるが、当時も「けがれ」をのぞくことを第一と考えたのであろうか。第一の目的は他にあったかと考

える。和歌の道にもふれ、「それと和歌は国のふうぞくにして、人の心をやしなふものなれば何をさておきて、(略)」和歌の心を体得するようすすめているのである。

#### 5 女今川教鑑（著者不明）

この書でもまず女性のつつしみ、行わぬがよいとすることをあげている。例えば、「夫をかしめ、我をたて、天道を恐れざること」舅姑、継子に対する心づかいについても述べている。また、幼少のときより心やさしく育てるには、交わる友を選べとしている。五常の理をうけて生れても、幼い時の習しにより、善人ともなり、或は悪人とかはると戒め、親の子に対する態度を注意している。「面に白粉をかざり、髪形を粧のみにて、心のゆるみを正さんとする人稀也」さらに、貧しくおとろへたりとも、恥ではない、それは志がすなおでむさばる事がなければである、と云う。「人を仕ふ事、日、月の草木、国土を照し給ふごとくところをめぐらせ」。すなわち、大自然の恵みの如く偉大で暖かい心で人に接せよとしているのである。

#### 6 童女専用女寺子調法記

この書は「女実語教」「女今川状」「女手習状」「女商売往来」を一括したものである。

**女実語教** この書でもまず、心のもち方、才智について教えている。「品勝れたるが故貴からず、心正しきをもって貴とす」「心を慎まざれば義なし、義なければ畜類にひとし」「三の従をまもり慎まずんば、何ぞみの障をまぬがれん」「身は住べき所にありて、家業の勉おこたる事なかれ」「眉目かたちは衰あり、貞女の名は朽ちる事なし」など。

さらに、女功については、「物縫うわざあくることなかれ、縫針に怠ることなかれ。習ひ勤めて益あるは、績み、つむぎ、縫い針の業。一日に一針ならば、一年に三百六十針」などと、衣に関する技の習得を強くすすめている。

**女手習状** この書では「幼童児女寺子式目」における手習指導に関する内容と殆ど同様のことを教えている。従ってここでは省略する。

**女商売往来** この書の内容の要点は、町人の教育の項で既に述べ、その一頁の写真も掲載した。

#### 7 百人一首女訓玉文庫（編者不明）

この書では天智天皇の「秋の田のかりほの庵の……」をはじめ、柿本人麻呂の「あしびきの山鳥の尾の……」、持統天皇「春すぎて夏来にけらし……」、紀貫行「人はいざ心もしらず……」、紫式部「めぐりあいてみしやそれとも……」、その他、清少納言、安倍仲

磨等々、かつては「嵯峨山荘色紙和集」と呼ばれ、現在「小倉百人一首」と称している歌人の和歌を集めている。和歌の勉強と色紙への手習いをすすめる目的の書と考えられる。

#### 8 女誠絵入女童子教（筆者、女子氏名不明）

この書も、女性の心得、嫁の立場について、女功などについて、これまでの書と殆ど同じ教を示している。「悦のときにもいたく笑ず、腹立つ事ありともはげしくいかるべからず」「人として陰の徳を行へば、かならず陽の報ひあり」「朝には早起て、髪けづり、しうとしうとめにつかふまつれ、夕にはをそく寝て身を治め心のよからんことを願ふべし」「親にかわりて姑に付ても、うみつむぎ縫針をならへ」「たとひ綿ひき緒をうむとも（多忙でも）忠孝の志を忘るべからず」さらに、「妙法蓮華經の聞法は三千界の宝にも勝れり」と、宗教心をもたいせつにするようすすめている。

教育は社会状況に応じ、社会の要請により、その内容が決定される。三次図書館の多くの書籍のうち、僅かの女子教訓書を取りあげたが、三従の教え、七去の戒め、五常の道、あくまで謙虚で奉仕の精神を求められた江戸期。女功としては、まず紡、織、裁縫う技、さらに読・書・算の学文を貧富の差なく身につけるをよしとした当時の各書の内容が大同小異であることは当然のことと考えてよいであらう。

### III 教育機関

石川謙著「寺子屋」によれば、「室町時代には有名な大寺のみでなく、田舎に点在する寺々でも武家の子弟のみならず、近所に住む子どもを集めてひととおり文字教育、すなわち、読み・書きを習わせ、日常生活に必要な各方面の知識を教えた」とあるが、室町時代より貨幣経済が次第に広まり、武家以外の庶民も、生活を営む上に欠くことのできない読み、書きの教育を、学問ある寺々の住職を師として学んだというのである。近世を迎え、流通経済はますます隆盛となり、職人、商人のみならず、江戸中期享保年代には藩の奨励もあり、農村の営みが米作り中心から、種々の商品造りもすすみ、その商取引のため一段と農村生活の中でも、文字の果す役割は大きくなった。

その上大平の世の中で、文化的欲求の高まりもみられその結果、人々の強い要望により、まず大阪および周辺地域を含む関西一円の町人が中心となって、設立し、維持・経営した教育施設が寺子屋である。この寺子屋は、近世中葉から次第に全国に波及していったこと

も、石川謙の「寺子屋」にみられる。

既に述べた、浮世風呂三編巻之上の一節に10歳あまりの女の子が、朝起きるとすぐ寺子屋に行き、積みあげてある机を並べて始業の準備をすることを書いている。「主従日用条目」にも、商家の子女は七歳になれば読み、書きをはじめたとあるが、これも寺子屋での学習を述べているのである。

「日本教育史資料」第一分冊の緒言に、時の文部省総務局長、辻新次は、「本邦教育史ノ資料トシテハ最良ノ参考書」と述べる一方、一その内容検討を促してはいるが、「多年蒐集ノ功ハ決シテ空シカラザルヲ信ズルナリ」とある。（明治23年）

同資料によれば、維新前後までに開業した全国の寺子屋数は、15,000、このうち、江戸府内・武蔵国内の寺子屋に関しては「女子教育に関する一つの考察」第七報で簡単に述べている。

今回は、まず同資料第八分冊をもとに、江戸時代商業の中心地の一つとして栄えた大阪府の教育機関について調べた内容を報告する。資料では、教育機関を私塾と寺子屋に分けている。江戸期末までに開業した私塾数は18ヶ所、これら私塾のうち、漢学のみ指導学科とした塾は5ヶ所で最も多く、一私塾では朱子学、古学、詩文、医学を1人の医師が指導し、生徒は男子60名という。女子も就学した2私塾では、漢学、数学、筆道を学科とし、師匠は町人、生徒数は男子230名、女子50名。その他町人師匠の塾で、筆道、読書、算術を指導し、生徒数男子200名、女子150名と記載された塾1ヶ所がある。

次に寺子屋については、江戸末期までに大阪府内で開業した数448ヶ所。このうち町人の要望した読、書、算を教えた所が162、読、算のみとした所は168、読、習字を教えた所161、読書のみとする所66ヶ所、算術、習字を学科とした所34、習字のみとした所は39、珠算のみの寺子屋5ヶ所である。特殊な寺子屋と考えられるのは、弘化年間設立した寺子屋の中に、読、書、算、插花、茶道を武士の師匠1人で教え、寺子は男子70名、女子30名と記されている。また、読書、裁縫を、町人の男女各1名の師匠が教え、寺子数男子55名、女子65名とあり、さらに、明治元年の設立ではあるが、町人男子1人で、寺子男子65名、女子35名に裁縫、読書を指導したとある。上記448ヶ所の寺子屋のうち女子生徒が全く学んでいないとする所は29ヶ所（6.5%）のみ、一所の寺子数では、男子に比べ少数ではあったが、殆どの寺子屋で女子も学習した（裁縫を指導する所は

少数であったにもかかわらず）ことは、他地区に比べ女子の読み書きを必要とする度合いが強い地域であったといえるのであらうか。

同地域で寺子屋師匠をつとめたのは、僧侶が最も多く212名、町人155名、武士35名、医師33名、農人88名さらに、農人女子2名、その他神官などと記載されている。男子教師が裁縫を指導した点、時代が時代であるだけに奇異な感じなきにしもあらずといえるかもしれないが、明治に入りその初期裁縫の技術指導で全国から注目された人の中心に、千葉県人渡辺辰五郎（現、家政大学創設者）、仙台の人朴沢三代治の名がみられ、裁縫教授書などの著者としても上記2名の他、山田浅次郎、渥美桂次郎その他後世に名を残した男性裁縫研究者の存在と、結びつけて納得得ると考える。

次に、中国五県について、上記資料第九分冊を調べた。広島県の私塾61ヶ所、このうち女子も就学した塾は10ヶ所、しかし女師匠は只1人（和学、算道を指導）である。61私塾のうち漢学のみを指導した所は39と最も多い。この点から私塾は町人生活との関連は浅いと考えられるので塾は省略し、江戸末期までに開設された寺子屋について報告する。

石川謙は「日本教育史資料」の内容には、地域により調査に精粗の差が大きい」とその著書に述べているが、理在の中国地区五県の中でも、鳥取県、島根県に関しては、学科名、寺子数の不明の寺子屋が、広島県などに比べて多い。五県の調査結果は次の通りである。

寺子屋数(イ)、このうち女子が就学した寺子屋数(ロ)を第一表、(ロ)のうちおもな学科別の人数を第二表に示す。

第一表

県 名	イ	ロ	ロ/イ (%)
広 島	239	151	62.2
岡 山	962	886	92.1
山 口	849	484	57.0
島 根	638	113	17.7
鳥 取	98	8	8.2

第二表

		おもな教科					
県 名		習字のみ		読・書		読・書・算	
		人	%	人	%	人	%
広 島		36	23.8	69	45.7	40	26.6
岡 山		796	89.6	43	4.8	19	2.1
山 口		197	40.0	175	31.6	86	17.8
島 根		2	1.8	48	42.5	36	31.9
鳥 取		1	12.4	不 明		不 明	

習字のみの学習が極端に多数の岡山は、町人に大切な役割を果たすと考えられる読、書、算の学習者が少ない。かような結果となった要素は何か。資料作成時の調査上の問題も考えられるが、なお検討したい。

中国五県も一般に寺子屋1ヶ所当りの寺子数は、男子に比べ女子は少ない。なお、女子教師数は広島で5名、岡山で16名、島根3名が記載されている。

石川謙が「寺子屋」の中で述べている江戸地域における男子師匠100人に対する女子師匠数の割合は第三表の通りで、中国五県と比較にならない。都を遠く離れた地域の女子教育の遅れは否定できない。

第三表

④地 域	%	⑨地 域	%	⑩地 域	%
日本橋	90.6	麻 布	64.2	麴 町	51.3
京 橋	77.2	小石川	17.8	四 谷	25.0
深 川	62.7	本 郷	47.0	牛 込	63.6
浅 草	57.2	本 所	45.0	赤 坂	0
下 谷	45.9				
芝	20.9				
神 田	133.0				

④地域は一ヶ所の平均寺子数が多く、女子就学率は高い。

⑨地域には武家屋敷が多く一ヶ所の寺子数は多く、女子就学率は低い。

⑩地域は④⑨の中間的傾向

日本教育史資料でみる寺小屋では、裁縫、茶道、插花の指導は殆どとりあげていない。しかしこれまで記述した如く、町人・農人の子女は裁縫う技の習得が義務づけられていたといえるが、それはお針子としてお針屋の師匠から（一部では母親、姑から教えられた）、その他三味線、踊など、余裕ある家庭の子女は伝統的芸能、和歌、琴、室町期からの茶道、插花、謡などもそれぞれの師について学んだという。

## お　わ　り　に

第二次大戦後、独立国に立戻った昭和27年以後、社会状況の変化、科学の進展などにともない、9～10年の間隔で、小学校・中学校・高等学校の教育課程は改訂されてきた。

教育内容は、その世代の要請に依り、熟慮決定されるべきは当然であるが、その教育の基本は学校教育のみならず、家庭教育においても、「正しい判断力をもつ人間を育てる」「円満で明るく、好ましい人間性の形

成」でなくてはならないと考えるが、「学校教育法」にもこの点を明らかに示している。

源氏物語「帯木の巻」の「雨の夜の品定め」の中で光源氏、頭中将、左馬頭、藤式部丞4名の若き高級貴族男性が、宮中宿直のつれづれに、女性の品定めについて語り合い、4名の意見の一致した条件の一つは、「人からのよき」ことである。

人も知る阿仏尼がその娘紀内侍に書き与えた書「乳母のふみ」、また、室町期の代表的女子教訓書「めのとさうし」（著者不明）、「身のかたみ」（一条兼良著）の何れも、和歌、手習、音楽などの学習をすすめているが、これらの書でもこぞって学問の基本は「心根のよきこと」「相手を思う心」を養うことであるとしている。江戸時代においては、生活の必要上、農、工、商の女性にも初歩的とはいえ、読、書、算の学習、および芸能も家庭の事情に応じて習得させたことは、既に述べたところであるが、これらの学習にもまして重く考えられたのは「人づくり」で精神面の教育であった。そのためには、幼時から育てる人間の心づかいが大切とし、「悪人と成、善人とかはる事、其幼少よりの教によるべし」と述べていることは大いに考えさせられることである。

とはいえ、江戸期以前、また、江戸時代の女子に求められた精神的教誡の内容そのままだが現代に適合するとはいえない。しかし、現代に生きる我々も参考とすべき点、反省資料とすべき点は多く有ると考える。早朝より夕は星の輝きをみるまで過酷なまでの労働に夫婦共に従事した多くの農人。「金銀なくては人に生れし甲斐もなし」との戒めを受け、「先、町人の品位をわきまへ、町人の道理を知りて、後、其心を正し、其身を修めよ」との教えを基に、忍耐強く、精一杯その職務に努力した多くの町人。良かぬ農人、町人もあったであろうことは否定できないが、誠実に努力し、義理を重んじ、各自の責務の遂行に精進した、我々の先祖に敬意を表するとともに、過去の好ましい面は永く受け継ぎたいものと考えらる。

## 参 考 文 献

- |        |        |
|--------|--------|
| 百姓囊    | 西川求林斉著 |
| 町人囊    | 西川求林斉著 |
| 主従日用條目 | 池田義信著  |
| 商人生業鑑  | 岩垣光定著  |
| 家内用心集  | 寂照軒笑月著 |
| 鉄漿訓    | 三浦梅園著  |



町家式目分限玉の礎	大隠壮健翁著	刊行所	大坂	河内屋新次郎
浮世風呂	式亭三馬著			河内屋太助
日本永代蔵	井原西鶴著	女今川教鑑	著者不明	
西鶴織留	井原西鶴著		刊行所	江戸 須原屋茂兵衛
世間胸算用	井原西鶴著	童女専用	著者不明	
近松浄瑠璃集	近松門左衛門著	女寺子調法記	刊行所	江戸 山城屋佐兵衛
近世日本に於ける教育の発達	石川謙著	百人一首女訓玉文庫	編者不明	
寺小屋	石川謙著		刊行所	京都 近江屋卯兵衛
女今川貞操鑑	著者不明	女誠絵入童子教	著者不明（女筆）	
	刊行所 京都 菱屋孫兵衛		刊行所	京都 銭屋庄兵衛
寺小教訓諸職往来	著者不明	寺子読書千字文	著者不明	
	刊行所 江戸 仁寿堂		刊行所	江戸 木屋伊兵衛
幼童児女寺子式目	笹山梅庵著			

### Summary

During the Edo Period the women who belonged to the social classes of farmer, artisan and merchant were educated in basic reading, writing, arithmetic and other skills depending on their financial conditions as the Japanese economy in commodity market was developed, as the writer described in the earlier paper. It is very interesting that people in this period also valued the teaching of a mental attitude and an attitude in living one should keep in his/her mind, that is to say, the teaching of one's internality to straight up and lead a good life at his/her home and working place and also in the society, like in the saying "Whether a person can be good or bad is simply a matter of his/her early age education."

Of course, however, it must not be really true for us to say that the mental structure and the way that human nature should be that the people expected in the Edo Period or before that time can be understood by modern people. Even so, there are a number of points which we can refer to and use for our self-reflection.

Many farmers, both husbands and wives together, worked for their heavy farming duties from dawn till twilight time, and many townsmen did their best in their vocations having lessons of "There is no worth as a person without having gold and silver" and "First understand the dignity of being a merchant or an artisan, then straighten yourself up."

Of course, there must be bad farmers and townsmen, but we should have our respect to our ancestors who made great efforts, valued a sense of duty and did their best to accomplish their duties. We also should keep these good aspects of our tradition in our society forever.